

Contents \*\*\*\*\*

特集：ロシア出張報告～領土、外交、そして経済 1p

<先週の”The Moscow Times”紙から>

”How the Iraq war changed the U.S. 10 years on”

「イラク戦争から 10 年、アメリカはどう変わったか」 8p

<From the Editor> モスクワ紀行辞典 9p

\*\*\*\*\*

特集：ロシア出張報告～領土、外交、そして経済

先週 3 月 17 日から 22 日にかけて、モスクワに出張してきました。安全保障研究会（会長：袴田茂樹教授、事務局：ユーラシア 21 研究所）の一員として、IMEMO（科学アカデミー世界経済国際関係研究所）との日露専門家会議に参加し、またロシア外務省や上下両院、シンクタンクなどを訪問するという機会に恵まれました。ロシア訪問は筆者にとって初めてでありましたから、どこまで理解できたかは少々覚束ないところなのですが、それでもたいへん興味深く、収穫の多い 1 週間でした。

北方領土問題、外交思想、そしてロシア経済の課題など、「あれっ？そうだったのか」と気づかされたことを、ここでは紹介してみたいと思います。

●領土問題～楽観論を排す

このところ日ロ関係が動意づいている。メドベージェフ大統領の時代には、国家指導者として初の国後島訪問が行われたりして、日露関係は急速に冷え込んだ。ところがプーチン大統領が戻ってきてからは、昨年 3 月に領土問題「引き分け」発言が飛び出したりして、二国間関係改善への機運が高まっている。

4 月末には、安倍首相が日本の首相としては実に 10 年ぶりにロシアを公式訪問する予定である。公式訪問となれば、少なくとも共同声明が出されるだろう。果たして、懸案の領土問題にどんな進展があるのか。対中、対韓関係が難しい折りだけに、日本外交にとって対ロ関係の前進は悪い話ではない。少なくとも、資源・エネルギーの対日輸出や極東開発での協力は進みそうである。

ところがこの点は、出張前に下調べをした段階ですぐに勘違いに気がついた。プーチン大統領の「引き分け」発言を受けて、日本国内では「こちらは4島一括で返せと言っている。先方は2島を返すと言ったことがある。その間をとるのであれば、3島なり面積二等分の3.5島なりが落としどころだろう」という認識が広がっているようだ。

ところが外交の世界はそれほど甘くはない。1957年の日ソ共同宣言は、「平和条約締結後に歯舞・色丹の引き渡し、それ以降領土問題はなくなる」と言っている。「引き渡すとは書いてあるが、主権については何とも言ってない」のである。つまりロシア側の態度としては、「現状維持の0島が出発点で、日ソ共同宣言の2島が最大限の譲歩」ということになる。たとえ旧ソ連のような独裁国家であれ、今日のロシアのような（体制翼賛型の？）民主主義国家であれ、領土問題で譲歩することは容易ではないのである。

これに対し、日本側の公式姿勢は「4島の帰属に関する問題を法と正義に基づき解決し、平和条約を締結する」（東京宣言、1993年）というものである。「4島の帰属問題を解決する」のであって、「今すぐ耳をそろえて4島全部返せ」と言っているわけではない。返還方式や時期に関しては、意外と柔軟に構えているのである。

2月21日、訪口した森喜朗元首相はプーチン大統領に対し、「引き分け」という言葉の真意を尋ねている。その答えは、「勝ち負けなしの解決、双方受け入れ可能な解決」であったという<sup>1</sup>。「0~2島」を考えているロシアと「2~4島」を思い描いている日本では、合意点は「2島返還」のみとならざるを得ない。しかるに日本側としては、2島ではまったくの期待外れとなる。安倍首相としても、「4島でなければ、この話はなかったことに…」とプーチンの誘いを振り切るのが、国内政治的には安全策ということになるだろう。

思うに日ロが70年近くにもわたって、領土交渉を続けているのは国際政治上の一種の「奇観」ではないだろうか。世界中のあらゆることが変化し、ソ連はロシアに変わったというのに、日露関係は同じ議論を繰り返している。そして領土問題を抜きに日ロ関係は動かさないし、かといって互いに安易な妥協もできない。

北方領土問題の難しさは、連立方程式で解かなければならないという点にある。日本側としては、中国および韓国と領土問題を抱えている最中に、ロシアが中韓と共同戦線を組まれると困る。幸いなことに、ロシアは他国の領土問題には中立的な立場であり、尖閣諸島はセンカク、竹島はドクトと「実効支配している側と呼ぶ」ことを原則にしている。しかるに対ロ交渉で甘いところを見せれば、中韓に付け込まれることは覚悟せねばならない。

アメリカとの関係も重要である。超リアリストであるロシア側から見たら、日米関係が弱っているときの日本に譲歩する理由はない。もちろん、米ロ関係が悪いときも妥協したくない。現状の米ロ関係は、シリア問題、ミサイル防衛配備、マグニツキー法（人権問題）などで揺れている。今回のキプロスの問題もまた、新たな火種となりそうである。

そしてそれ以上に厄介なのが、中国との関係をどう見るかである。

<sup>1</sup> <http://www.rg.ru/2013/02/22/putin-yap.html>

筆者はロシア語が全く読めないが、この写真を見る限り二人の関係は非常に良さそうである。

## ●ロシア外交～「上から目線」のアジア観

「中国（の台頭）をどう見るか」は、最近の国際会議における定番のテーマである。今回の日露専門家会議においても、そういう議論が何度も繰り返された。ロシア側意見の最大公約数は、「中国は挑戦ではあるが脅威ではない」というものであった<sup>2</sup>。

ロシア側の発想というのは、よく言えば戦略的で大局的な見地に立っており、この点は、縦割り組織やタコソボ思考を得意とする日本人とは対極にある。が、悪く言えば旧冷戦時代を引きずっていて、米ソ超大国時代のような「上から目線」が抜けていない。確かに核戦力という面から言えば、今でもロシアは圧倒的な大国であるのだから、「中国何するものぞ」という発想になるのも不思議ではない。

他方、ロシア式「上から目線」においては、経済問題は得てして後回しとなり、しばしばピンとのズレた議論に陥りがちである。北極星の位置から地球儀を見降ろすような思考をしていると、つつい足元（下部構造）が見えなくなってしまうのかもしれない。

ロシアがアジアを見る際も、この「北極星の視点から見下ろすような思考」が顔をのぞかせる。今回、訪問してみて分かったのだが、ロシア外務省という組織のアジア局は以下のように分かれているらしい。

- \* 第1アジア局（中国、朝鮮半島担当）
- \* 第2アジア局（インド、南アジア担当）
- \* 第3アジア局（日本、東南アジア担当）

アメリカ連邦政府の組織を見慣れた目には、日本と韓国が別々のグループに属しているのが奇異に感じられる。が、これはアメリカが日韓双方を同盟国としているからであり、モスクワに視点を置いてアジアを見ると、上記の三層構造が自然なのである。

まず「第1」は、国境線を接している身近なアジア。次に「第2」は、歴史的に友好関係にあったインドを中心に親しみのあるアジア。そして「第3」は、海の向こう側にある遠いアジアということになるのだろう。そしてロシアの国益から見たら、優先順位が「第1>第2>第3」ということになることは想像に難くない。

こういう「上から目線」の相手に対し、「領土問題」という一点集中主義で対抗している日本外交は、さぞかし厄介な相手だと映っていることだろう。つまり、日本側の「下から目線」外交にロシア側が手を焼いている。この構図、日露戦争の昔から変わっていないようでもある。第三者の立場から見れば、日ロの領土交渉は対照的な個性のプレイヤーによる面白い外交ゲームということになるのかもしれない。

<sup>2</sup> 今回の日本側メンバーの一員、宮家邦彦氏が中ロ関係について報告しているのでご紹介まで。  
<http://jbpres.ismedia.jp/articles/-/37416>（モスクワにチャイナタウンを作らせないロシアの狙い）

## ●外交思想～日本とはまったく対照的

それくらい日ロの外交思想は違っている。大陸国家と島国、気候の厳しさと温暖さ、多民族国家と均質な国民性、人口の希薄さと稠密さ、など諸条件の違いが、まったく相反する思考法を育んできたのであろう。

というのも、生来が楽天的で無精者の筆者でも、モスクワで5日間も過ごすと用心深くなるのである。3月だというのに外は零下の気温で、細かな雪がひっきりなしに降っている。とにかくコートと帽子は手放せず、忘れようものなら命にかかわる。出張間際に慌てて買ったリーボックの厚底シューズも大正解で、「コストは度外視してでも、セキュリティに万全を期さねば」という発想になっていく。これでは性格が用心深くなり、ときに猜疑心が強くなることも無理からぬことだろう。かくして政府関係施設に入るときには、セキュリティチェックのために延々と時間を費やすことになる。効率性は無視されるので、経済活動にははっきり不向きな社会である。

他方、厳しい環境はときに「変わり身の早さ」を要求する。歴史上にその名を留めるのは、ナポレオン率いる大陸軍に対して行った焦土戦術である。1812年、モスクワに入ったナポレオンが見たものは、ほとんどが焼け落ちた木造の市街地だった。これでは食料も水も容易に手に入らず、冬将軍をかわす屋根にも事欠くことになる。かくして大陸軍は撤退を余儀なくされるのだが、この作戦がロシアの「お家芸」なのである。

つまり勝てないとなったら平気で退却する。しかも大切な自分たちの街に火を放つ。逆に自分たちが優勢だとなれば、遠慮なく前へ出てくる。日ソ中立条約を破って日本に攻め込んだのも、たぶん罪悪感はあまりないのであろう。こうした「伸縮自在性」は、これもまたロシアに伝統的な思考ではないかと思う。

厳しい自然条件は、ロシアが低信用社会となった主たる原因でもある。袴田茂樹教授は、個人主義が成立している西欧は「石社会」、人間関係が濃密な日本は「粘土社会」、そして流動性の高いロシアは「砂社会」と評している。高信用社会の典型である「粘土・日本」から見ると、「砂・ロシア」には流しのタクシーというものが存在しないことに驚いてしまう。おそらく不特定多数を相手にする商売は、リスクが高過ぎるのであろう。

日本のような高信用社会においては、「損して得とれ」「情けは人のためならず」式の長期的思考が有利になる。これとは対照的に、低信用社会においては「取れるときに取れるだけ取る」という短期的思考が合理的となる。

キッシンジャーは大著『外交』の中で、スターリン外交を「バザール商人」と表現した。社会主義のソ連がヒトラーのドイツと組んだ独ソ不可侵条約は、「欧州情勢は複雑怪奇」（平沼騏一郎首相）という衝撃を日本にもたらしたが、究極のリアリスト外交を旨とするロシアの伝統から言えば、ごく自然な発想だったのであろう。ただし理念に目が曇るアメリカ人や、お人よしの日本人にはなかなかこれが理解できないのである。

面白いもので、①セキュリティ重視、②伸縮自在性、③究極のリアリスト、という3点をロシア外交の特色と位置付けてみると、これらは全部、日本人や日本組織が苦手とする思考法である。すなわち、①「安全はタダ」と考えて効率性ばかりを追求し、②環境が変わっても組織の目標を容易に変えられず、③組織の意思決定は、その場の空気に流されやすい、などである。ロシア的なものと付き合っていると、ときどき腹が立つこともあるのだけれど、自らの至らなさを教えてくれる貴重な学習機会になるのではないかと思う。

ロシア出張を終えた3月22日、アエロフロート機で10時間揺られて成田空港に到着したところ、もう桜が咲いている春の景色にありがたみを感じながら、彼我の自然環境の違いをしみじみと認識させられた次第である。

## ●ロシア経済～日本にとっての含み資産

さて、次なる問題はロシア経済である。

本誌の2月22日号「転機の新興国市場を考える」で紹介したように、2002年から2011年までの間にロシアの一人当たりGDPは2380ドルから1万2993ドルへと実に5.5倍に成長した。高度成長自体はけっしてめずらしいものではないが、「10年で5倍」というケースは稀有であろう。この間の国民生活の変化は、劇的なものであったに違いない。

ちなみに同時期の日本経済は、3万1241ドルから4万5870ドルへと1.5倍になっている。ただし成長分は、ほとんどが円高を反映したものであろう。生活水準が「10年で5割増しになった」と感じている日本国民は、ごく少数なのではないだろうか。

ところがわれわれの日常において、ロシアについて肯定的な評価を聞くことは滅多にない。ロシア経済が好調だという話を聞いても、「あそこは中間層が育っていない」「資源輸出に依存した経済成長だ」「石油価格さえ下がれば、一気におかしくなるに違いない」などの否定的反応が返ってくる。インドやフィリピンについても同様な傾向があるが、これらの国は、「いいニュースは報じられないが、悪いニュースはすぐに伝わる」というバイアスがあるように感じられる（逆にミャンマーやベトナムは、いいニュースばかりが伝えられているのではないだろうか）。

ロシアに対する否定的態度は、さまざまな歴史的事情によって日本人の骨身に沁み込んでしまっている。ところがロシア側は、日本に対して特段のわだかまりは持っておらず、対日感情はむしろ良い方である。この非対称的な関係は、いわば日本側の「含み資産」と言ってもいいだろう。逆に多くの日本企業は、中国という歴史的な「隠れ債務」を持った国で苦闘を続けているわけで、何ともしぐはぐな行動に見える。

そのロシアでは「東方シフト」が始まっている。本来はヨーロッパ国家であるはずのロシアが、アジア太平洋地域への関心を深めている。ちょうどアメリカでも、オバマ政権下で「リバランシング」が課題となり、中東からアジアへと外交の重心を移すことが検討されている。成長地域であるアジアが、米ロの関心を引くのはいわば当然のことだろう。

ロシアは 2012 年に初の APEC 議長国になり、プーチン政権は開催地のウラジオストックにインフラ投資で 200 億ドルを投下した。またハバロフスクに極東発展省を創設し、元州知事のイシャエフ氏を大臣に任命した。さらに極東の資源を開発し、パイプライン網の建設を急ぎ、天然ガスの輸出規制も緩和する構えである。加えてスチン・ロスネフチ社長などの腹心を相次いで日本に派遣するなど、盛んにシグナルを送っている。

ところがこれらのニュースも、「ロシア・バイアス」によって妙に捻じ曲げられて解釈されてしまう。「極東ロシアの人口減少が深刻になっているからだ」「中国に対する共同戦線を張ろうとしているのだろう」「シェールガス革命で、いよいよガスの売り先がなくなって焦っているに違いない」などである。

もちろんそういう側面も否定できない。ただしわれわれは、「ロシアという国をいつも歪んだ目で見ているかもしれない」と、反省してみることも無駄ではあるまい。日本とロシアは隣国ではあるけれども、同文同種でもなければ一衣帯水でもない。違う国土、違う民族、違う文化であり、前述の通り根本的な発想も違う。それだけに「分かり合えなくても当たり前」という者同士の気安さはある。

そういう割り切った姿勢でロシアを見てみれば、「東方シフト」は日本にとってのチャンスに違いあるまい。少なくとも、極東の天然ガスや石炭を安く安定的に買う機会が目の前に転がっている。「北方 4 島が返ってくるまでは口もききたくない」と横を向いてしまうのは、少々もったいないのではないだろうか。

## ●成長戦略～豪州モデルは可能か？

一人当たり GDP は「10 年で 5 倍」になったとはいえ、今後のロシア経済の伸び代をどこに求めるか。資源価格はそれほど伸びないだろうし、公共投資主体の成長もいつまでも続けられない。そしてロシアは、日本と同じ人口減少社会である。

モスクワの「赤の広場」といえば、あのネギ坊主型の聖ワシリィ大聖堂やレーニン廟（工事中だった）が有名だが、隣接しているショッピングモールが印象深かった。世界中のブランドが一堂に会している光景は、世界中どこでも似たようなものであるけれども、ここではロシアの自国製品が全く見当たらない。「ソチ 2014」のキャラクターショップは例外として、ソニー、サムソンからコーヒーショップまで外資ばかりなのである。

ここで思わず筆者は、「世界的ウオツカ・ブランドのトップ 5 には、ロシア企業の名は見当たらない」というルチル・シャルマの指摘を思い出した。そして「モスクワ証券取引所には、世界的な製造企業が 1 社も上場されていない」とも<sup>3</sup>。ロシアは見事に消費大国となっているけれども、製造業では国際的製品のプレイヤーが育っておらず、コモディティ以外の大手企業が存在しないのである。

<sup>3</sup> いずれも本誌推奨の『ブレイクアウト・ネーションズ』（早川書房）P130 から。

こんな状況で、どうやってさらなる経済発展のストーリーを描くことができるのか。プーチン大統領の立場になって考えてみると、ロシアの成長戦略はなかなか悩ましい。現政権は「脱・資源輸出依存」を模索してはいるものの、製造業育成も外資が頼りというのが実態である。さて、どうしたらいいのか。

「資源依存型の経済は必ずしも悪ではない」と指摘するのは、丸紅経済研究所のシニアアナリスト、榎本裕洋氏である<sup>4</sup>。OECD加盟国の実質GDP成長率を調べると、過去32年間で最も安定成長を遂げているのは豪州経済である。農産物や鉱物資源の輸出に依存していても、その品目にバランスがとれていて、供給能力が高ければ問題は少ないのだと言う。だったらロシアも、苦手な製造業を追いかけるよりも、資源輸出の競争力を極める方が合理的ではないか。

豪州経済と言えば、日本との関係が深い。豪州は人口が少ない割に豊富な鉱物資源を有し、「ラッキーカントリー」との異名を持つ。ただし、資源というものは常に探査して開発を続けなければならず、そのためには常に資金が必要となる。資源が売れなければ資源は掘れないし、下手をすれば外資に権利を持って行かれてしまう。資源国というのは、決して楽な立場ではないのである<sup>5</sup>。

豪州が真の意味でラッキーであったのは、1950年代から日本が本格的な工業化に成功し、豪州産の資源を大量に買い続けたことであった。貿易の増加に伴って、豪州は外貨を獲得することができ、直接投資も着実に増加した。つまり豪州経済の発展には、日本という需要国が必要だった。そして日本もまた、天然資源を頼れる友好国に恵まれたという意味で、「ラッキーカントリー」だったということになる。

資源輸出ビジネスにおいては、売る側と買う側の協力が重要である。その点で、現状の日本向けの天然ガス輸出などは、ロシア側は相変わらずの「売ってやる」姿勢に終始しているのではないだろうか。しかるにそういった短期的視野では、「豪州モデル」のような息の長い成長を目指すことは難しい。特に極東地域は輸送インフラが課題とされている。投資をさらに呼び込むためにも、需要国と供給国が相互依存するような関係が望ましい。

IMEMO との日露専門家会議において、「日露の経済協力」というテーマを与えられた筆者は、上記のようなポイントについて触れ、「日本とロシアがともに Lucky Countries になることが重要」と述べたのだが、あいにく反応は乏しかったようだ。

実際問題として、豪州が日本からの投資を呼び込むことができたのは、同国の「オープンで透明な制度、政策」があったからである。同じことをロシアに望むとなると、同国特有の閉鎖性がある簡単ではなさそうだ。とはいえ、どこかこの辺に日ロ関係改善のための知恵があるのではないかと筆者は考えている。

<sup>4</sup> 「極東ロシアから太平洋ロシアへ～当面期待されるのは中国を含むアジアへの供給力」（3月15日）を参照。<http://www.marubeni.co.jp/research/1561/008904.html>

<sup>5</sup> この話は本誌2006年11月2日号「南半球の今日的風景」の焼き直しである。

## <先週の”The Moscow Times”紙から>

”How the Iraq war changed the U.S. 10 years on”

By Joseph Nye

「イラク戦争から 10 年、アメリカはどう変わったか」

March 19<sup>th</sup> 2013

\*ロシアを代表する英字紙、モスクワタイムズの **Opinion** 面にハーバード大学のナイ教授の論考が掲載されていました。そういえば開戦日は 2003 年 3 月 20 日でありました。

<抄訳>

米国主導のイラク進攻から今月で 10 年になる。この決定は、その後の 10 年にどんなことをもたらしたのか。そしてそれ以上に、あの決定は正しかったのだろうか。

肯定的な側面としては、サダム・フセインの体制が打倒され、選挙で選ばれた政府が樹立された。イラク経済は年 9% で成長し、石油輸出は戦前のレベルを超えた。「たっぷり 2 世代は停滞していた地域を動かしたのだから、捨てたものではない」と評する論者もいる。

疑う向きはイラク戦争とアラブの春を結びつけるのは間違っていて、ブッシュ大統領が民主主義を中東に広げようとしたのは間違っていたとする。フセインは除去したものの、イラクは今や分離主義グループが支配する危険地域となり、世界 174 か国中 169 番目の腐敗度である。さらにコスト面の問題がある。15 万人のイラク人と 4500 人の米兵が殺され、1 兆ドル近い費用（3.2 万人の傷病兵への長期的ケアのコストを含まず）がかかっている。

たぶん、10 年後の損得勘定は違っていようが、現時点では懐疑論に軍配が上がる。向こう 10 年、アメリカは他国を長期間占領したり、改造したりすることはあるまい。ゲーツ元国防長官曰く、かかる提案をすれば「お前、気は確かか？」と問われるであろうと。

これを孤立主義と呼ぶ者もいるだろうが、慎重なプラグマチズムと呼ぶ方が良いだろう。1954 年、第一次インドシナ戦争でアイゼンハワー大統領は、危険だからとディエンビエンフーの仏軍救出に米兵を出さなかった。しかし彼は孤立主義とは無縁であった。

イラク戦争の成果を論じるのに 10 年は短い、ブッシュ政権の決断を論じるには十分である。ブッシュとその高官たちは、イラク進攻に 3 つの論点を挙げた。

第 1 の論拠はフセインとアルカイダの連携である。世論調査によれば、多くのアメリカ人が政府の言葉を信じたが、その証拠は薄っぺらで誇張されたものであった。

第 2 点はフセインの代わりに民主的な体制を作り、中東を変えることであった。政権内のネオコンたちは、政権発足後の 8 か月はそれができなかったが、9/11 後にテロリストが作ったチャンスを生かしたのだった。ブッシュは持論を説明する際に、第 2 次大戦後のドイツと日本の民主化における米軍の役割を好んで語ったものだ。しかしブッシュの歴史的アナロジーは無邪気なものであったし、占領のための適切な準備を欠いていた。

第 3 点は、フセインによる大量破壊兵器の保持を防ぐというものであった。フセインが国連安保理決議に違反していることはほとんどの国が認めていたし、特に決議 1441 号は、立証義務をフセインに課していた。しかし大量破壊兵器はなかった。より慎重であれば、もっと検査に時間をかけたであろうが、これは独りブッシュだけの失敗ではない。



ブッシュはトルーマン大統領に自らを比し、再評価もあり得ると述べている。大統領の評価には最低半世紀は必要とはいえ、トルーマンのマーシャルプランと NATO 設立は当時から偉業と見られていた。ブッシュはイラクの失敗を補うような他の成功を欠いている。

歴史は不運には冷たいものだ。だが歴史家は運不運から指導者を判断する。良いコーチはゲームを分析する際に、エラーや幸運を計算するものだ。不注意な実験や不要な冒険は得てして「不運」の原因となる。ブッシュの欠如に対して未来の歴史家は厳しいだろう。

たとえ意外な出来事により 10 年後の中東が良くなっていたとしても、ブッシュが下した決定とリスクとコストをばらまいたことは批判の対象となるだろう。人々を山に登らせることと、崖っぷちに導くことはまるで別物なのである。

## <From the Editor> モスクワ紀行辞典

以下は、初のロシア出張中に筆者が出会った素朴な発見の数々です。いやあ、寒かった。でも、面白かったなあ…。

●**アエロフロート機**：アエロフロートが本当にアエロフロートであったのは、ソ連製の機体が飛んでいた頃の話であって、今では普通のエアバスの機体なのでそんなに居心地が悪いわけではない。それにしてもロシア人の巨体が、よくまあこの狭いエコノミークラスの座席に入るものだと感心することしきり。

●**入国管理**：長蛇の列を覚悟して並んでみると、外国人レーンはせいぜい 5 人待ちであった。しかも全体に明るくてきれいである。往時を知るロシア専門家陣によれば隔世の感があるとのこと。今や入国管理カードもちゃんと自動で出てくる。もっとも、短期滞在でもビザとホテルのバウチャーが必要、というスタイルは以前と同じである。

●**ホテル**：「ホテルのフロントでパスポートを一晩取り上げられる」という事前説明であったが、今では写しをとってハイおしまい。しかも館内は WiFi が行き届いていて、ネットに簡単につなげるし、部屋からは国際電話もタダであるという。と言いつつ、本当に国際電話をかけてみた仲間は誰も居なかった模様。

●**毛皮の帽子**：ロシアでは定番のあの帽子。けっして伊達ではありません。人間の頭がい骨には肉も脂もついていませんから、極度な寒さにさらされていると脳が変になってしまうのだそうです。ですからスキー帽でもいいから、ちゃんと耳も隠れる帽子があった方がいい。くれぐれも「モスクワの散歩」は、「北京のジョギング」と同じように危険です。

●**時差**：日本との時差は、以前は 6 時間だったのですが、現在は「1 年中夏時間」にしてしまったので 5 時間となっております。朝は早く目が覚めるし、夜はすぐに眠くなるので、晩飯の時間になると急速に元気がなくなります。

●**インテリゲンチヤ**：IMEMO で出会った研究者たちは、揃いもそろってタルコフスキー

の映画に出てくるような憂鬱を抱えた中年男たちです。彼らが好むのは戦略を語ること。言葉の端々に文化や教養がにじみます。ああ、これが本当のインテリ。

●**コーヒータイム**：国際会議につきもののコーヒーが、当地ではなんとネスカフェ！郷に入っては郷に従えと、何年振りかでインスタントコーヒーを頂戴しました。ロシアはやはり紅茶文化なんですね。

●**交通渋滞**：モスクワの街中には「駐車場」というものがほとんどない。皆さん平気で路上駐車する。そうして一車線になっているところで乗降するクルマがあつたりすると、たちまち渋滞が起きてしまう。いかにですねえ。恣意的に交通法規を取り締まり、見逃しては賄賂をとると悪評高き交通警察も、駐車違反には手を出さないみたいです。

●**アネクドート**：セルゲイ君は念願かなって、交通警察の一員となった。さっそく日々、職務に精励していたところ、3か月後に上司に呼び出された。慌てて出頭したセルゲイ君、おそろおそろお伺いを立てた。

「あの一、私が何をしたんでしょうか」

「君なあ、仕事をしているんだったら、ちゃんと給料を取りに来ないとダメじゃないか。もう3か月分もたまっているぞ」

「え？ お給料もいただけるんですか？」

●**マトリョーシカ**：ご存知、ロシア定番の人形。アルバート通りを歩くと、この手の土産物を並べたお店がたくさん並んでいる。早くも習近平国家主席のマトリョーシカを売っておりました。開けると胡錦濤が出てきて、その次は江沢民で、鄧小平が出て、最後は小さな毛沢東が出てくる。感心するけど、買わないよねえ。先日亡くなったチャベス大統領や、引退したばかりの李明博大統領なんかもいたけど、さすがに日本国首相はゼロ。あまりにも数が多過ぎますものね。さて、安倍さんのマトリョーシカが誕生するのでしょうか？

そんな中で唯一、日本人キャラを発見！それはサッカーの本田圭佑。彼はモスクワの選手なんですねえ。けがのために中東遠征のメンバーからは外れちゃいましたが、日ロ両国のファンがプレイを待ち望んでおりますぞ。

\* 次号は通常のペースに戻って4月5日（金）にお届けする予定です。

編集者敬白

---

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までをお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com)